

はじめに

学 長 高 田 宏

平安女学院大学は今年2003年、開学から4年目を迎えました。平安女学院という学校には明治8年
以来の128年におよぶ歴史と伝統があり、短期大学も半世紀にわたって学生たちを育成してきました
が、大学としてはまだ歴史というほどの歴史を持っていません。

しかし、それだけに、未来への夢は大きいと思います。未来図は、これから設計してゆくのです。
ぼくはこれまでに大小6種類の雑誌の創刊にかかわってきました。そして、創刊とその展開ほど面白
い仕事はめったにあるものではないと思っています。大学の創学にも同じようなことがあるはずで
す。そういうチャンスにめぐり合うことができ、好運だと思います。

ぼく自身は大学創立の準備にかかわってはおりませんが、早くからこの仕事にたずさわってこられ
た教職員のみなさまは、ご苦労はもちろん多かったことでしょうが、千載一遇の好機に出会われたの
だと思います。

鉄は熱いうちに打て、です。いまがそのときです。夢の鋳型をみんなで打ち出して行きたいもので
す。教職員も学生も、縁あってこの大学に集まっているわけです。力を合わせて未来図を描き出して
ゆきましょう。

先生がたはいろいろな大学や研究機関などからこの大学へ転じてこられたわけです。いわば混成集
団ですが、ぼくのわずかな見聞で言えば、いまはすでに一体感のある集団が生まれつつあるという感
触があります。

この研究年報も、その一体感の醸成の一翼を担うものではないでしょうか。いや、そうあってほし
いと切望します。

「研究年報」あるいは「紀要」という、大学所属の研究者による論文発表誌は、その大学の研究水準
を示すものでもあります。ぼくは、もう一つの役割を持っているのではないかとかねがね思ってい
ました。未完成でも大胆な試論を問う場でもあってよいのではないのでしょうか。

ぼくがかつて編集していた「Energy」という季刊の文化誌がありました。毎号ひとつのテーマを掲
げた特集雑誌です。毎回、数十人の執筆者（大半が学者・研究者）に書いてもらっていたのですが、
おねがいしていたのはその筆者の従来の研究成果の発表ではなく、新しい研究の芽を出してもら
うことでした。かなりの方がその要望に応じてくださり、それから何年かのうちには、それらの芽が
大きく育って行くのを見たものです。

研究年報にも、よく実った研究の成果の発表もあり、研究の途中報告もあり、ものになるかどうか
は不明の“芽”があってよいと思います（芽は小さくてよいのです、原稿枚数は少なくても、思い切
って大胆な試論 Essay が研究年報の付録のようにしてたくさん出されるといいと思います）。

ふたたび言います、鉄は熱いうちに打て。研究に、教育に、みんなで力を合わせ、夢の鋳型を打ち
上げて行きましょう。